

大会報告



第9回品質工学技術戦略研究発表大会報告

RQES2016 企画委員会

2016年11月18日（金）、東京千代田区の星陵会館において、第9回品質工学技術戦略大会を「“品質工学に何を求めるか トヨタ自動車(株)パワートレーンカンパニーの場合”」の大会テーマの下で開催した。大会参加者は215名（会員139，非会員46，賛助会員17，名誉会員6，招待，7）であった。産業技術総合研究所 小池昌義の総合司会で、品質工学会会長 谷本 勲の開会挨拶のあと、トヨタ自動車パワートレーンカンパニーの取り組みについて、講演2件と事例4件を中心に、パネルディスカッションが行われた。

参加者は昨年より大幅に多く、トヨタ自動車への関心の高さをうかがわせる。今のままではトヨタ自動車が危ないという危機感からトヨタ自動車（の一部技術者）が品質工学を再スタートさせた。このままでは自社のみならず日本の産業界自体も危ないという危機感をもってトヨタ自動車が事例を発表した。非常に内容の濃い、素晴らしい発表となった。

欧州メーカーがシステムで提案しないサプライヤとは付き合わないとして、全体最適を目指している状況に対応して、日本が遅れを取らないように、品質工学を活用すべきと言う提案は重要である。トヨタ自動車の発表を機会に品質工学の活用が広まることを期待したい。

開催にあたって

これまでの任意団体である品質工学会は9月16日付で解散、改めて一般社団法人品質工学会として再スタートしたことを皆さんに報告します。そして第9回技術戦略研究発表大会は一般社団法人品質工学会としては初の公式行事になります。先ず一般社団法人品質工学会の発足を皆さんと共に祝いたいと

思います。これからも一般社団法人品質工学会として社会の発展に寄与していきたいと思っております。

品質工学の原点は故田口玄一名誉会長の品質の定義、「品質は社会の損失である」にあるとした私の思いは6月の品質工学研究発表大会で述べさせて頂きました。技術者は大きな矛盾を背負っています。技術の原点はユーザーニーズにあると言われながら、技術開発の達成度をユーザーニーズから直接評価する方法がないこと、その達成度をコストとの関連で何処まで引き上げると言う事です。田口玄一先生は「品質は社会の損失である」というものさしを示し、この解法として機能性評価と損失関数を提案され、「品質とコスト」と言う技術者最大の矛盾を一気に解消したのです。ここに品質工学の原点があります。

その後学会活動として、個々の技術課題について評価技術を具体的に積み上げて来ました。具体的な事例がないと品質工学の研究ではないと言われるのもここが出发点になっていると思います。しかし一方ではそれらを纏め、技術者がすぐ応用できるように体系化することも大切な仕事です。品質工学研究発表大会がスタートして10余年後に始まった技術戦略研究発表大会はこの認識で始められたと思います。技術戦略研究発表大会の「戦略」は個々の戦術的研究を受けて、分野別、課題別に体系化することで技術開発プロセスを画的に改革することを意図しています。そして次なる段階は改革の総合化です。技術の完成度を製造、管理の改善に生かし、技術、製造、管理の三部門を一体として改革を進める横の三位一体の改革、更に技術者の生み出した事例をシステムとして纏め、「技術者の自由」を拡大するマ